

先週、四月八日の花祭りは、お釈迦さまの誕生を祝う日である事をお話し致しました。今週は、お釈迦さまがお生まれになられた家を捨てて、お悟りを開かれるまでの修行についてお話し致します。

釈迦族の王子ゴータマ・シッダールタとしてお生まれになられたお釈迦さまには、快適に暮らすために春・夏・冬のそれぞれに住む三つの御殿があり、何の苦勞も知らず、極めて裕福な生活をされていました。

その生活の中であって、或る日、御殿の東の門から出ると年老いた人を見ます。「あれはどうした事か、私もそうなるのか？」と驚きます。また別の日に南の門から出ると病気の人を見ます。東の門から出た時と同じようにお釈迦さまは驚きます。更に西の門より出ると亡くなった人を見ます。この様に生まれると、老いる事・病む事・死ぬ事の苦しみが生じるのだとお釈迦さまは気付きます。これを「四苦八苦する」の生老病死の四つの苦しみ「四苦」と言います。

お釈迦さまはこれによって、今ある自分にも疑問と苦しみを感じ、悩みました。そして或る日、北の門から出ると修行者を見ます。修行者の顔は清々しく、自分とは違う心持ちの顔つきです。出家修行者の生活こそ四つの苦悩を克服する為の生活だと確信し、修行者になる事を決意されたのです。

御殿にある総てを捨てて修行者になられたお釈迦さまは、正しい道を説く人を求めて、先ず瞑想を行じている修行者に就いて修行されますが、すぐにその瞑想をきわめてしまいました。更に深い瞑想を行じている修行者のもとに就きましたが、同じような結果になりました。瞑想だけの彼らの修行では、四苦について何の解決もされませんでした。

そして『苦行』という断食などの大変苦しい修行を始めます。事実、お釈迦さまの苦行は壮絶で、身体はやせ細り、何度も死にかけながら、六年も続けました。肉体を弱らせる苦行は、こだわりや欲望などの気持が消えるが、同時に意識も失い、中には死に至る修行者もいました。命の尊さを顧みない苦行では、真の安らぎを得られませんでした。苦行も求めるべき道ではないと気付かれ、それを放棄され、尼連禅河という川で身を清められます。

そして、菩提樹のもとで坐禅を組まれてお悟りに至ります。お釈迦さまの悟りは、決して短い時間で得られたものではありません。お釈迦さまが生きとし生きる者の苦

しみを見つめ、修行されたからなのです。

その後、悟りを開かれたお釈迦さまは人々のために四十五年間にわたり、自らの足で教えを伝える旅に出られるのです。